

SHŌGUN

SHOGUN

ジェームズ・クラベル 著

将軍

上卷

綱淵謙錠 監修

宮川 郎 訳

トビックス

将 軍（上巻）

1980年9月5日 初版

1980年11月1日 初版第7刷

著 者——ジェームズ・クラベル

監 修——網淵 謙錠

訳 者——宮川 一郎

発行者——吉 田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

郵便番号102 電話 (03) 230-0311

振替東京1-131334

印刷・製本—凸版印刷株式会社

© Ichiro Miyagawa, 1980

0097-225001-4968

落丁・乱丁本にお取替えいたします

日本語版への序文

『將軍』は、過ぎし日のロマンスであり、フィクションではありませんが、歴史上の事実に基づき、歴史上の人物に想を得て書いたもので、あるいはみなさまに御迷惑をおかけし、御辛抱を願う点もあるかと思いますが、最初にお詫びいたしておきます。

この小説は慶長五（一六〇〇）年を再現しようとしたものであります。もちろん、徳川幕府の誕生をめぐる物語は、日本では数多くの書物や映画になっております。しかし、私の知る限りでは、英語で書かれたものは一冊もありません。そこに登場する人物たちの名は、みなさまにとっては、きわめてよく知られたものであるはずですが、私がその名を変えて登場させていることもお詫びしなくてはなりません。私は物語作者であつて歴史家ではありませんので——その点への御非難もあるかと思いますが——一人のガイジンが、たとえ外国には知られていないとはいえ、みなさまがよく御存じの国民的な英雄たちの言行を実名で書くことは、僭越なことのように思われたわけであります。

というわけで、『將軍』は、徳川家康に関する実話ではなく、吉井虎長という（日本語ではそれほどではないかと思いますが、英語にすると響きのよい名）、稀にみる賢明な大名が、將軍職に就きたいと思つたわけではなく——本人がいうには——日本を再び惨めな戦国の姿に戻したくないと願ひ——本人がいうには——平和を確立し、合わせて、卑しい生まれから身を起こして武將となり、日本統一の偉業を成しとげ、幼い一子と美貌の側室を残して死んだ一人の英雄の遺志を継ぐとする話であります。

それ見ろ、やはり日本の歴史物語ではないか、とおっしゃるかもしれませんが。そうかもしれません。しかし、私は史実を語るつもりはありません。もちろん私は現実らしく見せるために全力を尽くしましたが、物語はあくまで物語なのであります。そういえば叱られるかもしれませんが、『將軍』は、ガイジンがガイジンのために書いた小説です。とはいえ、この人たちは驚くほど日本について無知であり、日本のすばらしい文化と芸術のことを知りません。その人たちに、日本の姿を初めて見る機会をもつてもらおうと思つたのが『將軍』です。幸い、何百万もの方に、初めて、日本とその歴史、その文化を見てもらふことができました。しかし、その展望のほとんどは簡略すぎるほどのものです。また、

間違ひもあります。間違ひのいくつかは故意にしたもので、いくつかは作者が日本人でないため、認識のいたらないことによります。日本のある種のことは、説明のできません。外人が外人にしようと思っても——時には日本人でもわからないとおっしゃいますから。真に理解するためには、日本人に生まれなければならないでしょう。その意味では、『將軍』は、鏡に映した世界なのであります。

残念ですが、私は日本語が書けませんので、訳者の方の手をわずらわすことになり、すべてをお預けしたのですが、一つだけお断りするのを許されれば、英語版の『將軍』は、熱烈な親日の精神で書かれた物語であり、私は全力を傾けて、正確でありたいと努力しました。私は日本のために願いました。心から。

それでは、最後にもう一度お願い申し上げますが、どうぞ、最初の数ページをお読みください。もしお気に召したら、また少しお読みください。そしてお時間がいただければ、私の案内で、一六〇〇年に「神国」に流れ着いたイギリス人ジョン・ブラックソーと近づきになってください。この男の「縁^{カギ}」は、日本の身分の高い女性に恋し、日本を愛し、侍となるように定まっておりました……

一九八〇年七月

カリフォルニアにて

ジェームズ・クラベル

目次

日本語版への序文

將軍 3

解説——ウィリアム・アダムスの時代的背景 524

訳者あとがき 530

将 軍

上
卷

女よりも船が好きな、海の男のなかの男が二人いた。いま本書を、その英国海軍の大尉たちに捧げる

ロイヤル・ネイビー

著者ノート

本書の執筆にご協力いただいたアジアならびにヨーロッパのすべての方たち——すでに亡くなられた方も含めて——に謝意を捧げたい。

カリフォルニアにて

序 章

強風が体をひきちぎらんばかりに吹きつける。風がはらわたに食い込んでくる。あと三日のうちに陸地を発見して上陸できなければ、全員が死ぬだろう。今度の航海では、あまりにも多くの人間が死んだ。おれは死の船団の水先案内人の少佐だ。五隻だった船のうち、残ったのは一隻、一〇七名の乗組員のうち、残ったのは二八人。しかも、歩けるのはやっと一〇人で、そのほかのものはほとんど死にかけている。船団長もその一人だ。食べ物全くない。水もほとんどない。少しばかり残っている水は塩気があるうえに濁っている。

男の名は、ジョン・ブラックソーン。前方見張りの「だんまり」のサラモンのほかには甲板にいるのは彼一人だけだ。サラモンは風をよけ、物陰にしゃがんで、前方の海を見つめている。

船は突風に揺らぐ。ブラックソーンは椅子のひじかけにつかまって、船がきしみながら元にもどるのを待つ。この椅子は、後甲板の舵輪の近くに縄でくくりつけてある。船の名はエラスムス、二六〇トン、三本マスト、ロツテルダム発の武装商船で、大砲二〇門を搭載している。この船は、新大陸の敵を壊滅するために、オランダから送り出された最初の遠征軍の船のなかの唯一の生き残りである。そして、マゼラン海峡の秘密を解き、そこを通った最初のオランダ船であった。四九六人の船員はみな志願者だった。そのうち三人のイギリス人——水先案内人二人と、士官一人——を除けば、あとはみなオランダ人だった。彼

らの使命は、新大陸におけるスペイン人とポルトガル人の財産を略奪し、焼き払うこと、永久的な貿易拠点を開設すること、オランダ領土として永久的な基地となるような新しい島々を太平洋に見つけること、そして三年以内に故国へもどること、であった。

プロテスタントのオランダは、カトリックのスペインと四〇年以上も戦争状態にあった。オランダにとっては、憎むべきスペインの支配の枷を断ち切るための戦いだった。オランダは、ときにはホランド、ダッチランド、またはロウ・カントリ（低い国）と呼ばれるが、法律的には、いまだにスペイン帝国の一部だった。イギリスはオランダにとって唯一の同盟国だが、キリスト教国のなかでは最初にヴァチカンと袂を分かった国であり、プロテスタントになってから七〇余年になる。イギリスもまた、過去二〇年、スペインと戦争状態にあり、オランダとは一〇年ほど前から公然と同盟を結んでいる。

嵐は一段と強まり、船が傾いた。嵐用の上檣帆を除いては、マストから全部帆を下ろしてある。それでも潮と嵐が、船を暗闇の水平線のかたへ強く押しやっている。

嵐はもっと強くなるだろう、暗礁や浅瀬も増すことだろうと、ブラックソーンは思った。そのうえ、未知の海だ。よからう、おれはこれまで海と闘ってきた。そして、いつも勝ってきた。これからも必ず勝つてやる……

マゼラン海峡を通ったイギリス人としては最初の水先案内人、そう、そして、アジア水域を航海する最初の水先案内人だ——世界を自分のものだと思っている何人かのポルトガルやスペインの野郎どもを除けば。この海に乗り入れた最初のイギリス人——

「最初」がいくつも並んでいる。そうだ、その「最初」をかちとるために、実に多くの人間が死んできた。もう一度、ブラックソーンは風に向かってにおいをかいでみた。しかし陸地らしいにおいは感じられない。海のかなたを探してみるが、見えるのはただ暗く灰色にたけり狂う海だけだ。海藻の一片もなければ、

砂の浅瀬を暗示する水の色の変化もない。右舷のかたに、暗礁のとがった突起が一つ見えるが、それとて陸地には縁のないものだ。ここ一ヵ月の間、岩礁に船は脅かされてきたが、陸地の影は見たこともない。この大海原には果てがないと、ブラックソーンは思う。よからう、そのために訓練されたようなものだからな——未知の海を航海し、その海図を作り、そして故国に帰るためにな。ところで故国を出てから何日目だ。一年と一ヵ月と二日か。最後の上陸地はチリだった。あれから、八〇年前に初めてマゼランが航海した太平洋と呼ばれる海を横断しはじめて一三三日目になる。

ブラックソーンは飢えていた。口も体も壞血病のために痛む。羅針盤で船の向きをチェックしようと、目をこらし、およその位置を算出しようと努力した。現在地を航海日誌に書き込んでしまえば、彼は太平洋のこの地点では安全になるだろう。彼が安全ならば、船も安泰であり、ともに日本という国にたどり着けるだろう。あるいは、キリスト教徒のプレスター・ジョン王と、その「黄金の帝国」さえも見つけることができるかもしれない。伝説によれば、そいつは中国の北のほうにあるそうだ。中国がどこにあるにせよだ。

そして、財宝の分け前を手し、再び船に乗って西に向かい、世界を一周した最初のイギリス人水先案内人として故国に帰る。帰ったらもう二度と航海には出ない。二度と出ないぞ、息子^の首にかけても。

強風にあおられてブラックソーンの夢想は破れ、我に返った。いま眠るとだめだ。眠ったら二度と目が覚めないだろう。そう思って、腕を伸ばし、張った背中の筋肉をほぐし、外套の前をかき合わせた。帆の具合を確かめ、舵輪が縄で固定されているのを確認した。舳先^{へさき}の見張りは起きている。ブラックソーンは忍耐強く席に腰を据え、陸地の見えることを祈った。

「下に降りていいですよ。よかったら、私が見張りを引き受けますから」三等航海士のヘンドリック・スベッツが舷門から足をひきずるように出てきて言った。顔は疲労で血の気がなく、目は落ちくぼみ、肌は

荒れて土気色になっている。ヘンドリックは羅針儀箱にのめるようにもたれると、体を安定させた。少し吐きたいらしい。「ちくしょう、オランダを発った日が恨めしい」

「航海士はどうした、ヘンドリック」

「寝棚の中ですよ、あいつは、あの難破ベッドから出られないんですよ。出てきませんよ、こんな、この世の終わりのみたいな日にはね」

「船団長は」

「食べ物だ、水だと言いながら、うめいていますよ」と、言って、ヘンドリックは唾を吐いた。「若鶏を丸焼きにして、その上からブランデー一本ひっかけて、銀の皿に盛って持ってきてやるとでも、あいつに言ってみようかな。ちくしょう、難破野郎の大ばかめ」

「いいかげんにしろ」

「わかりました。でもあいつは、ほんとに大ばかで、あいつのおかげでこちらでも死ぬようなものだ」若者はそう言う、吐き気をもよおし、胃液を吐き出した。「ちくしょう、助けてくれ」

「下へ行け。明け方になったら上がってこい」

ヘンドリックは、空いている椅子に苦しうに身を沈めた。「下へ行くと死人のにおいがするんだ。もしよければ、見張りをやらせてください。コースはどうなってます」

「追い風まかせだ」

「あなたが約束した上陸地点はどこです。日本はどこです。どこにあるんです」

「前方だ」

「いつになっても、前方だ」。ばかばかしい。我々が受けた命令には、未知のところへ行けというのはなかった。いまごろは、こんなに腹をすかすこともなく、聖エルモの火を追いかけることもなく、無事に故

国に帰っているころなんだ」

「下に行け。そうでなければ、黙ってろ」

ヘンドリックは、この背が高く、ひげを生やした男から、ぶいと目をそらした。いったい、我々はいまどこにいるのだろう。彼は聞いてみたかった。どうして、あの秘密の航海日誌を見せてもらえないのだろう。でもおまえなら水先案内人にこんな質問をしてはいけないのはわかっている。特に、そのことはな。

それはそれとして、オランダを脱出したところに元気だったらなあと思った。そうしたら、こんなふう到我慢しやしない。いますぐに、薄青い目をたたきつぶし、その腹の立つよううすら笑いを、顔から吹っ飛ばしてやるのに。そして、いままでの報いに地獄に突き落としてやる。そしたら、おれが船長で水先案内人だ。つまりオランダ人が船を動かすことになる——外国人でなくてな。そして、あの秘密が我々の手に入る。間もなく、オランダはおまえらイギリスのやつらと戦うんだからな。おれたちだって、同じものが欲しいのさ。この海を支配し、すべての貿易航路を押さえ、新大陸を支配し、スペインをやっつけるためにな。

「たぶん、日本なんてどこにもありやしねえ」と、ヘンドリックが突然つぶやいた。「とんでもねえ伝説さ」「確かにある。北緯三〇度から四〇度の間だ。さあ、しゃべるのをやめるのか、下へ行くのか」

「下は死臭がするんだ。水先案内人」ヘンドリックはぶつぶつ言いながら、どうにでもなれというふうに前方を見ている。

ブラックソーンは操舵席の中で体を動かした。今日はいつもより体が痛い。おれはほかのだれよりも運がよかった。ヘンドリックより運がよかった。いや違う、運がよかったのではない。みんなより、用心深かっただけだ。ほかの連中は気にもせず果物を食べてしまったが、おれはとっておいた。注意もしてやったのだ。だからいま、おれの壊血病は軽いが、みんなは絶えず出血し、腸は下痢を起こし、目は炎症で

ひりひりし、齒はゆるんだり抜けたりしている。なぜ人間は、ひとの言うことをきかないんだ。

みんながおれを恐れているのはわかっていた。船団長でさえもそうだし、みな、おれのことを嫌っている。しかし、嫌われて当たり前だ。なぜなら、海上では指揮をとるのは水先案内人だからだ。航路を設定するのも、船を動かすのも、港から港へ船を運ぶのも、みな水先案内人のおれのことだ。

海図はほとんどなく、あっても役に立たないほどあいまいなもので、どこを航海するのも危険だらけだ。そのうえ、経度を測る方法が全くないといっている。

「経度を測定する方法を見つかるんだ。そうすれば、世界一の金持ちになれるぞ」と、彼の先生であるアルバン・カラドックが言ったものだ。「その難問に答えが出せば、女王はきつと、一万ポンドと公爵の位をくださる。あのくそくらえのポルトガル人ならもっと出すぞ……例えば、黄金でできた大帆船をくれるかもしれない。スペイン野郎だったら二万ポンドだ。陸地が見えないときは、なあ坊主、いつもおまえらは迷子も同然なんだ」それからカラドックは、少し間をおいて、いつものように彼に向かって、悲しうに首を振ってみせたものだ。「迷子も同然だ。もし……」

「もし航海日誌がなければ」と、ブラックソーンはカラドックに教えられ、よく勉強したことを思い出し、楽しそうに叫んだ。あのときは一三歳だったが、アルバン・カラドックにはその一年も前から師事していた。水先案内人であり、船大工であったカラドックは、ブラックソーンの亡くなった父親代りとなったが、決して彼を殴ったりせず、彼やほかの少年たちに対して、船を造る秘訣や、海のことについていろいろ教えてくれた。

航海日誌は、水先案内人が自分で行ったことのある海について、詳細に観察したことを書き記した小型の本のことである。それには、港、岬、岬の鼻、海峡などを結ぶ磁石の羅針盤によるコースが書き込まれ

ている。そのほか、水深や水の色、海底の状態なども記録されている。そして、どのようにしてそこに到達し、どうやって引き返したか、一つの航程に何日を費やしたか、風がいつ、どちらから吹いたかという風のバターン、どんな海流がどこからどう流れていたか、嵐の時間、順風の時間、さらには、どこで船を修理し、どこで水を補給するか、味方がいるのはどこか、敵はどこにいるか、浅瀬、暗礁、潮の満ち干、避難場所など、安全な航海に必要なすべてが記録されている。

イギリス、オランダそしてフランスは、各自の海域の航海日誌は持っていたが、そのほかの世界の海域を航海したことのあるのは、ポルトガルとスペイン人の船長ばかりであった。そして、この両国はすべてその航海日誌を秘密にしていた。新大陸への海路の秘密を教える航海日誌、またはマゼラン海峡や喜望峯の謎を明かしてくれる航海日誌——両海路とも、ポルトガル人の発見である——、そしてアジアへの海路などは、ポルトガルとスペインの国宝として守られ、両国の敵であるオランダとイギリスは、この秘密を必死になって探し求めている。

だが航海日誌は、実際にはそれを書いた水先案内人、それを手で書き写した人、それを印刷したごく少数の印刷屋、またはそれを翻訳した学者だけにしかわからなかった。つまり航海日誌には誤りのある可能性があり、その誤りはときとして故意のものであるからだ。水先案内人は、自分でそこへ航海してみないかぎり、正確なことはわからなかった——少なくとも一度は。

海の上では、水先案内人は指導者であり、ただ一人の案内者であり、また船と乗組員についての全権を持つ者だった。後甲板から、ただ一人で指揮をとるのが水先案内人である。

水先案内人という商売は、よくまわる酒みたいなのだと、ブラックソーンは思う。一度飲んだら忘れられず、また欲しくなり、それがなければいられなくなる。ほかの連中が死んでもおまえが生きていかれるのは、ひとつにはそいつのおかげだ。

ブラックソーンは立ち上がると、甲板の排水孔に排尿した。それから、羅針盤のそばの砂時計の砂が下に降りきるのを見て、ひっくり返すと、船の鐘を鳴らした。

「ヘンドリック、ずっと起きていられるか」

「うん、大丈夫だと思う」

「舳先の見張りの交代員をだれかよこす。そいつが風をよけずに、ちゃんと風の中に立って見張りをするように監視しろ。そのほうが、見張りは頭がはつきりして、起きていられるんだ」ブラックソーンは、船を風上に向けて、夜の間、停泊させたほうがいいのかどうかと一瞬考えたが、それはやめにして、昇降階段を降りて、船首楼のドアを開けた。階段は船員の部屋につながっていた。船室は船の横幅と同じ広さで、一二〇名の男たちの寝棚やハンモックを収容している。暖かい空気が彼を包んだ。ブラックソーンは、この暖かさに感謝し、船底から上がってくる相も変わらぬ悪臭は無視することにした。二十数名の男たちのなかで、寝棚から起きだしてくる者は一人もいなかった。

「マエツッカー、起きろ」と、彼はオランダ語で言った。それはいわゆるオランダで使われたフランカ語であり、ブラックソーンはポルトガル語、スペイン語、ラテン語と同様にこの言葉を完璧に話すことができた。

「おれはもう死にそうだ」と言うのと、この小柄で顔つきの鋭い男は、寝棚の奥にもぐってしまった。「おれは病気だ。見ろよ、壊血病で歯は全部抜けちゃった。助けてくれっ。このままじゃみんな死んじまうぜ。あんたがいなけりゃ、いまごろは、おれたちはみな無事に故国に帰っていたところだ。おれは商人だ、水夫じゃない。乗組員じゃないんだ……だれかほかの者にしてくれ。ヨーハン、そこに……」と、言いかけて、ブラックソーンに寝棚から引きずり出され、ドアにたたきつけられて悲鳴をあげた。口のまわりに血がにじみ、そのままのびてしまった。その横腹を激しくけられて、マエツッカーは意識をとりもどした。

「顔をちゃんと上げて、おまえが死ぬか、さもなくて我々が上陸できるまでそれまで上で見張れ」

マエツツカーはドアを開けて、苦しそうに出ていった。

ブラックソーンは、ほかの男たちに目をやった。みんなこちらを見ている。「ヨーハン、気分はどうだ」「いいよ。このぶんなら生きられそうだ」ヨーハン・ヴィンクは四三歳、砲手長で掌帆長であった。乗組員のなかではいちばん年長だった。頭がはげていて、歯もなかった。古い櫓の木のような肌の色をして、体も櫓おりのようにがんにょうだった。六年前、極東への北回り航路を探る航海にブラックソーンと一緒に出かけ、結果は失敗だったが、二人はお互いの人物を認め合うことができた。

「おまえさんの年じゃ、たいていの仲間は死んでるな。だからおまえさんがいちばん先だな」ブラックソーンは、三六歳だった。

ヴィンクは笑ったが、明るさはない。「そこにブランデーがある。そいつと姦通と聖なる人生とで、おれはここまで生きてきたさ」

だれも笑わなかった。そのとき、だれかが寝棚を指差した。「水先案内人、甲板長が死にました」

「死体を上にあげる。洗って、目を閉じてやれ。おまえと、おまえとでだ」

今度は、素早く男たちは寝棚を出ると、協力して、死体を半ば引きずるような格好で船室から運び出した。

「ヴィンク、夜明けの見張りをしてくれ。ギンセル、おまえは舳先の見張りだ」

「わかりました」

ブラックソーンはまた甲板に引き返した。

ヘンドリックはまだ目を覚ましており、船は順調に進んでいた。見張りを終わったサラモンがよろめきながら彼の横を通った。その様子は生きているというより、死にかけており、強風に当たった目は真っ赤